

新 年 の ご 挨拶

新年あけましておめでとうございます。

皆様健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年5月1日令和に改元され、10月22日には国民の喜びの中で即位の礼が厳かに行なわれ、新しい時代が幕を開けました。

当院は平成1年3月20日開院し、まさに平成とともに歩んでまいりました。いまあるのは地域の皆様のご支援のおかげと感謝いたしております。これからは令和とともに新たな一歩を踏み出す所存でございます。

さて、ラグビーのワールドカップは国中を熱狂させました。日本代表は日本人選手16人と海外6カ国出身の選手15人が“桜の戦士”の愛称のもと一つのチームとして戦い、初めてベスト8に入りました。スローガンの「ワン チーム」は昨年の流行語大賞に選ばれました。また、日本人ファンと海外ファンとが一体となった応援も見事でした。日本人はなかなか外国人と親しくなることが苦手と言われていましたが、外国人との交流も抵抗なくできる世代が多くなってきたようです。

昨年は災害の多い年でもありました。しかし、災害ボランティアの活躍はすばらしいものでした。災害が発生するや否や全国からボランティアが集まることが日常的になりました。

そして、沖縄の心の支えという首里城の焼失に際しては、寄付文化がないと言われていた日本で、首里城再建に対する寄付が10日間で4億円を超えました。

外国人との交流やボランティア活動そして寄付行為などのいわゆる社会貢献が一般的になってきたように感じます。

将来、令和元年が日本人にとって大きな転機の年であったと回顧されるのではないのでしょうか。

ところで、皆様は勝田ロータリークラブ(勝田RC)という集まりをご存知でしょうか。

ロータリークラブ(RC)とは職業人が集まり、職業を通じて社会に貢献する活動をする団体です。

ひたちなか市には那珂湊ロータリークラブ、勝田ロータリークラブ、ひたちなかロータリークラブの3クラブがあり、私は勝田RCに所属しています。

勝田RCは昨年創立45周年を向かえ、ひたちなか市に「ニセ電話詐欺抑止装置」100台を寄贈しました。高齢者が高額な金銭を騙し取られる事件を少しでも防げることを願っています。また、これから増加する外国人のために、国際交流センターを支援して「外国人に対する日本語教室」も開講しました。

自然に触れ合う機会の少なくなった子供達には、教育委員会とともに「自然体験キャンプ」を開催しました。子供たちが自然の豊かさを学び、協力して活動することの大切さを培うことを目的にしています。そして他のRCとともにひたちなか市子育て支援センター「ファミリコロポ」に図書を贈るなどいろいろな活動をしています。

最後になりますが、今年は2年に一度行われる診療報酬改定の年です。75歳以上の窓口負担については、一定所得以上は2割負担になるようです。また、200床以上の病院を紹介状なしで受診した場合は、自己負担に5000円以上上乗せされるようです。

保健財政が厳しい折、致し方ないのかもしれませんがなるべく患者さんの負担が少なくなるような施策を考えてほしいと思います。

当院はこれからも整形外科専門診療所として地域の皆様に貢献できるように職員一同努力いたします。

理事長 小松 満

奉仕の精神を確認
勝田RCが45周年式典

勝田ロータリークラブ 谷明司市長、高柳明彦RC小松満会長のひたちなか警察署長を約30人が出席した。小松会長の冒頭のあいさつで、台風や首里城焼失で開け、会員や大

小松会長(左)と谷明司市長(右)が、市民に貢献の意識を深め、日本での災害支援活動や寄付などの社会貢献が一般的になってきた。私たちが常務に地域に「ニセ」を感念し、奉仕活動を実行していきたいと話した。

「大谷市長は、この街づくりのために大切に使った人々に貢献の意識を深め、日本での災害支援活動や寄付などの社会貢献が一般的になってきた。私たちが常務に地域に「ニセ」を感念し、奉仕活動を実行していきたいと話した。

また、45周年記念事業として、同RCがひたちなか市に「ニセ電話詐欺抑止装置」100台を寄贈した。目標を達成するため、大谷市長は、この街づくりのために大切に使った人々に貢献の意識を深め、日本での災害支援活動や寄付などの社会貢献が一般的になってきた。私たちが常務に地域に「ニセ」を感念し、奉仕活動を実行していきたいと話した。

よみうりタウンニュース
令和元年十一月二十八日記事より

児童ら自然体験キャンプ
常陸大田 ひたちなかの80人が参加

ひたちなか市の小学生、児童ら約80人が参加した自然体験キャンプが、2泊3日の日程で行われ、今年度27回目。子どもたちは、炊飯や自然観察、

「二番つれ」は、新しい友だちができた。指導員の高橋生と仲良くなれた。そして、声を弾ませた。キャンプを支援した勝田ロータリークラブの小松満会長も、初対面でもあったという間に、親しくなるとも頼もしく思われ、良かったと笑顔だった。

ナイトハイキング、魚つかみ、写真撮影を体験した。

ひたちなか市立高野小6年の浅野和奏さんは、「二番つれ」は、新しい友だちができた。指導員の高橋生と仲良くなれた。そして、声を弾ませた。キャンプを支援した勝田ロータリークラブの小松満会長も、初対面でもあったという間に、親しくなるとも頼もしく思われ、良かったと笑顔だった。

よみうりタウンニュース
令和元年九月二十六日記事より

～変形性足関節症～

変形性関節症は関節軟骨のすり減りを主体とする疾患です。加齢に伴うものや骨折などの外傷、リウマチなどの関節炎が原因となります。

膝や股関節に比べて足関節の変形性関節症は少ないです。理由は足関節が脛骨(内くるぶし)と腓骨(外くるぶし)からなる凹に、距骨の凸がはまりこむ形をした非常に安定した関節であり、また軟骨の性質が膝関節や股関節と異なることがあげられます。

骨折によって足関節が変形したり、靭帯損傷などによって足関節が不安定になることで一部分に荷重が集中し、関節軟骨がすり減ることで痛みを生じます。足関節内側に痛みを訴えることが多いです。その痛みは膝や股関節の変形性関節症と同様に歩行に伴い、歩き始めや、長時間の歩行に伴って鈍痛を訴えることが多いです。症状が進行すると足関節が腫れ、外観上も変形が見られるようになります。

症状が軽い場合には鎮痛剤の内服や不安定性を改善するためにサポーターを 사용합니다。また、一部に集中する荷重を分散するために足底挿板(インソール)を 사용합니다。

症状が進行したときは手術が必要になります。

比較的変形が小さいときには、骨切り術を行います。(図1)脛骨(すねの骨)を切つて関節の形を矯正することで荷重を分散し、足関節を安定化することで痛みを改善します。足関節の動きも温存できます。

変形が大きい場合は関節固定術が行われます。(図2)『軟骨がすり減った関節が動くことで痛みが生じているのだから動かなければ痛くない』という考えです。ちょっと乱暴な考え方ですが、固定がしっかりできれば痛みはかなり改善します。また、足関節を固定しても、周囲の関節によってある程度動きが確保できるため、日常生活でほぼ困ることはありません。

医師 小松 史



(図1) 脛骨骨切り術



(図2) 関節固定術

第19回日仏整形外科学会 (SOFJO) のご紹介

(La 19ème Réunion de la Société Franco-Japonaise d'Orthopédie)

副院長 星 忠行

この度、第19回日仏整形外科学会（図1）を、2020年6月20日（土）21日（日）の両日、札幌市の札幌コンベンションセンターにおいて、会長として開催させていただくことになりました。日仏整形外科学会は1987年に創設された伝統ある学会で、現在会員数は190名を超えております。会の主な活動は、2年に1度の学術集会を通じての日本とフランスの整形外科医の交流と、交換研修制度による若手整形外科医のフランス留学になります。これらの活動を通じて、学会は日本には比較的なじみの薄い、独自の歴史を育んできたフランス整形外科に触れる機会を提供してきました。

今回、有床診療所の勤務医の私が、この学会を担当させていただくことになり、大変名誉なことと思っております。この紙面をお借りしまして、私の日仏整形外科学会との関わりと、今回の学会のご紹介をさせていただきたいと思っております。

私は昭和58年に弘前大学整形外科学教室に入局しましたが、私の日仏整形外科学会との関わりは、昭和62年、東北地方に初めて膝関節鏡を導入された小松満先生（現：当院理事長）の下で、当時の国立弘前病院で膝の手術の指導を受けたことに始まります。その後、膝関節外科の道に進み始めた私は、昭和64年、弘前大学医局時代に福岡整形外科病院に国内留学の機会を与えていただき、当時院長の小林晶先生（写真1）と巡り合いました。（小林晶先生は、日本膝関節研究会の会長も歴任された膝関節の重鎮の先生で、またフランス整形外科にも造詣が深く日仏整形外科学会を発足させ、平成26年にはフランス政府から卓越した功績のある民間人に贈られるレジオン・ドヌール勲章を授与されております。）そこで、私は小林晶先生に膝関節手術の指導を受けた後、日仏整形外科学会の交換研修制度でのフランスへの留学のお話をいただきました。平成4年、当時の弘前大学整形外科 故原田征行教授のお許しをいただき、私はフランス留学をすることができました。フランスでは、膝関節外科の中心と言われたリヨンに行き、リヨン大学関連病院 (Centre Hospitalier Lyon-Sud) で、Henri Dejour教授（写真2）の手術を勉強する機会を得ました。帰国後、弘前大学関連病院での勤務の後、平成16年に当院に赴任し、現在まで膝関節の治療を中心に診療を続けています。

フランス留学後は、恩返しのつもりで日仏整形外科学会に可能な限り参加し、学会発表も細々と続けておりましたが、平成29年の夏に突然、恩師の小林晶先生から、第19回日仏整形外科学会の会長のお話をいただき、“えっ、私がですか？”と耳を疑いました。青天の霹靂とはこういうことなのかと、驚きと、責任の重さに悩みましたが、出身医局の弘前大学整形外科学教室（石橋恭之教授）、同門会（岡村良久会長）、小松満理事長のご賛同もいただき、ご協力をお願いしながらお引き受けした次第です。

今回の学会のテーマは、整形外科の科学的な議論のみならず、日仏友好交流を文化的にも促進できればとの希望を込めて、“*Passerelle Culturelle et Scientifique*”（文化と科学の架け橋）としました。フランス側からは、リヨンのPhilippe Neyret 先生（写真3）、ボルドーのIbrahim Obeid 先生、トゥールのLuc Favard先生、アルゴネのLaurent Jacquot 先生（写真4）の4名の先生が参加されます。学会の構成は、特別講演（フランス人、小林晶先生）、パネルディスカッション（膝蓋骨脱臼）、一般演題、日仏交換研修帰朝報告になります。また学会初日(6/20)の夜は全員懇親会を予定し、日仏の交流を深めていただきたいと思います。

2020年6月の札幌は、会場変更で話題となりました8月の東京オリンピックのマラソン競技開催を間近に控え、活気づいているものと予想されます。異常気象がささやかれる昨今ではありますが、初夏の札幌の涼しさの中で、フランス整形外科の香りが漂う本学会の開催に向け、準備を進めていきたいと思いますので、皆様のご協力宜しくお願い致します。

学会ホームページ <http://www.congre.co.jp/sofjo2020/>



図 1



写真1 小林 晶 先生 (88 歳)



写真2 H. Dejour 1992



写真3 P. Neyret 2003

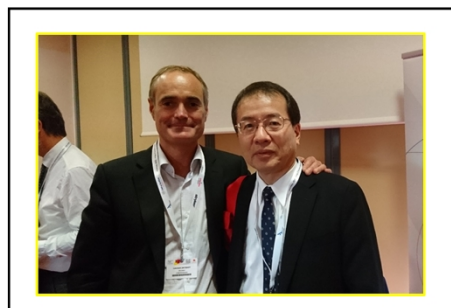


写真4 L. Jacquot 2018